

# オサーマ・ビン・ラーデンの対米ジハード宣言

保坂修司

以下に訳出したのは、ウサーマ・ブン・ラーデン（オサーマ・ビン・ラーデン）のもっとも重要な声明のひとつとされる対米ジハード宣言（二聖モスクの地を占領するアメリカ人に対するジハード宣言、以下「宣言」と略）である。この「宣言」は、いろいろなかたちで言及、引用されていながら、これまできちんとしたかたちで日本語に訳されることはなかった。しかし、ウサーマの基本的な哲学を凝縮しているという点では、今でも読む価値は充分あると思う。なぜアメリカを攻撃しなければならないのか、なぜそれがムスリムにとってのジハードになるのか、ウサーマ哲学の原点がこの「宣言」にあるといっても過言ではない。

## 「宣言」の位置づけ

声明やインタビュー、書簡などウサーマの生の声について、邦訳者はすでに簡単な分析を行ったことがあり、そこではこうした声明のなかに捏造されたものが多いことを指摘しておいた<sup>(注1)</sup>。むろん、「宣言」もまずこの問いからはじめねばならない。たとえば、1996年11月27日付『クドスアラビー』紙に掲載されたインタビューでインタビュアーが「宣

言」に言及しながら、ウサーマに質問している部分があり、そこでウサーマは「宣言」の内容を前提としたうえで答えている。また2001年に公開された1996年8月23日付書簡に「預言者の死以来、ムスリムに起きた最大の惨劇はアメリカ十字軍とその同盟者によるカアバの地、全ムスリムの礼拝の方向の占領である」という「宣言」にある文章ときわめて似たような表現が見られる。書簡の日付と「宣言」の日付が同一であることから、おそらく書簡のなかで「宣言」の文章を引用したものと推定される（書簡と「宣言」が同一である可能性も否定できない<sup>(注2)</sup>）。この類の証拠はいくつかあり、「宣言」をウサーマの親筆と断定して間違いないだろう。

一方、西側ジャーナリストとしてウサーマにはじめてインタビューを行った『インデペンデント』紙のロバート・フィスクは、ウサーマが実際に「宣言」を書いたことをコンファームしたと述べている<sup>(注3)</sup>。彼は「宣言」発表直前の7月にアフガニスタンでウサーマに2度目のインタビューを行っており、このコンファームはそれだけ信用できるといえるだろう。

さらに、「宣言」の発出された時期を考えると、それがウサーマの活動のなかで大きな

分岐点を形成していることがわかる。1996年7月、アメリカ国務省は、ウサーマを国際的なテロリストとするファクトシートを発表した。すでにそれ以前からウサーマの名はさまざまな事件で取りざたされていたが、アメリカが公式のかたちでこれほど明確にウサーマをテロリストと名指ししたのはこれが最初であろう。ウサーマはすでに単なるサウジアラビア反体制派ではない。国際的なイスラーム活動家（アメリカから見れば、国際テロリスト）へと昇進したのである。ちょうど同じころ、ロンドンではロンドン在住のイスラーム主義者たちを中心とする大規模な集会が準備されており、ウサーマもそこに参加するとの噂が広がっていた。結果的には集会そのものがイギリス政府の圧力もあって、中止になった。もしかしたら「宣言」がこの集会のために準備されたものである可能性もある。

「宣言」以前の声明では、ウサーマは、ローカルな話題をローカルな論理でもって、あるいは国際的な問題をローカルな視点で論ずることが多かった。しかし、「宣言」においてはサウジアラビア駐留アメリカ軍を主命題とはしているものの、なるべくローカル性を目立たなくしようとする意図を読み取ることができる。あるいはローカルなテーマにより普遍的な意味をもたせようとしているといってもいいだろう。たとえば、従来の声明ではピン・パーズやアールッシャイフ家などワッハーブ派のウラマーたちの発言を引用していたのだが、「宣言」のなかではワッハーブ派のウラマーからの引用は、反体制派に属するものへの言及をのぞけば、まったくない。その意味でいえば、「宣言」はウサーマの国際社会への本格デビューと位置づけられ

るかもしれない。

「宣言」の内容は、声明やインタビューのかたちで彼が主張してきたことの集大成という位置づけができる。ウサーマは従来からアメリカ批判、サウード家批判、パレスチナ問題への取り組みなどを個別に論じてきたが、こうした問題は9月11日事件以後の声明のなかでもいやというほど繰り返される。これらはすべて「宣言」のなかに包括的に盛り込まれているのである。したがって、ウサーマの思想に通底する世界観を把握するためには「宣言」は必須の材料といえる。というよりも、「宣言」抜きにして、9月11日事件の本質を理解するのは不可能であろう。9月11日事件およびイラク戦争のなかで、イスラームとテロの問題が大きく、かつ頻繁に取りあげられるようになった。しかし、当事者による最重要文書が蔑ろにされたままなのは、実際にはわれわれのこの問題への関心が皮相であることを表しているのではないだろうか。イラク戦争が終結し、アメリカ軍のサウジアラビア撤退が発表され、中東和平へのロードマップが示された今でも、ウサーマの生死、居場所は不明であり、カーイダの活動は依然として活発である。

### 原典

「宣言」のオリジナルはアラビア語で、正式名称は“*l'lan al-Jihād 'alāal-Amrikiyīn al-Muḥtilliyīn li-Bilād al-Kharamayn*”である。当然、このアラビア語原典から翻訳すべきであったが、実際に邦訳の定本としたのはサウジアラビア反体制派、法的権利擁護委員会（CDLR）のムハンマド・マスアリーによる英

訳である。アラビア語を利用できなかったのはアラビア語版を入手できなかったという単純な理由による。

アラビア語テキストには2種類を想定できる。ひとつはアフガニスタンから直接送付された真の意味でのオリジナルの「宣言」である。1994年以降、ウサーマはロンドンに忠言と改革委員会ロンドン事務所という事務所を維持し、さまざまな声明類をそこから発出していた。この事務所が「宣言」を配布した可能性は否定できない。

もうひとつの版は「宣言」発表直後1996年8月31日にロンドン発行のアラビア語日刊紙、『クドスルアラビー』が掲載したテキストである。「宣言」発表後わずか1週間で公開情報として明らかになったことを考えると、実質的にはこれがオリジナルといえるかもしれない。『クドスルアラビー』は購読者数も少なく、またサウジアラビアを含む一部アラブ諸国では発禁になっている。だが、おそらくオリジナルとしてはこれがもっとも普及していると思われる。邦訳者もこの版の取得を試みたが、残念ながら徒労に終わった。インターネットで検索したり、専門家のメーリングリストやサウジ関係のニュースグループでも聞いてみたりしたが、やはり無駄であった。また英訳者のCDLRにも何度か尋ねてみたが、黙殺された。『クドスルアラビー』紙にも電子メール、ファックス、電話とさまざまな手段を使って連絡したが、該当記事をコピーする許可を得ることはできなかった。同紙の説明では、バックナンバーはすべて、コピーしにくいかたちで製本されており、複写することはできないとのことであった。また大英図書館に打診したところ、新聞記事のコピ

ーは原則として写真によるため、また著作権の問題が発生することもあり、全部コピーするとなると莫大な金額がかかるといわれ、断念した経緯がある。

### マスアリーによる英訳版

一方、英訳が登場したのは1996年10月のことであった。当時邦訳者はCDLRが運営する電子メールのメーリングリストに加入していたため、CDLRから定期的に反サウジ情報を入手していた。「宣言」の英訳はそのメーリングリストを使って世界中にばらまかれたのである。なおマスアリーが利用したアラビア語原典が何なのかは、英訳版ではまったく触れられていない。この英訳はその後、とくに1998年のアメリカ大使館同時爆破テロをきっかけにさまざまな場所で紹介されることになり、また多数のインターネットのウェブページで掲載されることになった。したがって、世界的に見れば、アラビア語版以上にこの英訳が実質的な「定本」となっていく。入手しやすさから見ても、現時点では圧倒的に英訳のほうが普及しているといえよう。邦訳にあたっては、このメーリングリストで邦訳者が個人的に入手したものを定本として利用している。

邦訳は厳密なテキスト批判にもとづく学術的な翻訳を目指しているわけではない。むしろ、ウサーマの哲学のエッセンスや彼の論理構成、方法論を全体的に理解できるようにすることを目的としている。その意味では英訳からの重訳であっても、価値が極端に下がるわけではないと信じている。また英訳者のマスアリーは、英訳が「非常に正確な翻訳」で

あると述べていることも申し添えておこう  
(ただし、英語の間違いは散見される)。

また邦訳者の所有するテキストには“ Declaration of War against the Americans Occupying the Land of the Two Holy Places ” という表題がつけられている。オリジナルの電子メールにはないが、その後、この「宣言」は Ladenese Epistle という優雅な名前では呼ばれるようになり、学術的な著作においてもこの呼称は一般化してきている。

邦訳に際しては、原文の雰囲気や損なわないよう直訳を旨とした。したがって、日本語としては冗長な表現が目立つかもしれない。

ハディースなど本文中の引用はできるかぎりアラビア語原文にあたったが、出典が判明しなかったものも少なくない。四角括弧 ([ ]) は邦訳者が補った部分であるが、それ以外の括弧は英訳テキストにあったものである。ただし、英訳テキストではそれらの括弧が著者によるものなのか、英訳者によるものなのかははっきりと示されていない。英訳は全体が3部にわかれているが、これもオリジナルのアラビア語が3部にわかれていたのか、それとも英訳者が便宜的に分割したものなのかは不明である。

## 邦訳：二聖モスクの地を占領するアメリカ人に対するジハード宣言

{ アラビア半島から異教徒を追放せよ }

ウサーマ・ブン・ムハンマド・ブン・ラーディンから  
世界中、とくにアラビア半島のムスリムの兄弟たちへのメッセージ

讃えあれアッラー<sup>(注4)</sup>、われらその助けとお赦しを求めん。われら、過ちと悪行からの保護をアッラーに求めます。アッラーにより導かれたものは道を踏み誤ることなく、道を踏み誤ってきたものは導かれることなし。わたしは、アッラーのほかに神はおらず、アッラーに並ぶものなきことを証言する。わたしは、ムハンマドが神の僕にして、使徒であることを証言する。

「汝ら、信仰ある者どもよ、アッラーを、神にふさわしい畏敬の念をもって畏れ奉れ。どのようなことがあるとも必ず、死ぬ時には立派な帰依者として死ねよ。」(コラシム 3:102)<sup>(注5)</sup>

「人間どもよ、汝らの主を畏れまつれ。汝らをただひとりの者から創り出し、その一部から配偶者を創り出し、この二人から無数の男と女とを(地上に)播き散らし給うたお方にましますぞ。アッラーを畏れまつれ。汝らお互い同士で頼みごとする時に、いつもその御名を引き合いに出し奉るお方ではないか。また母の胎をも。アッラーは

汝らを絶えず嚴重に監視し給う。」(コーラン 4:1)

「これ、信徒の者、お前たちアッラーを懼れ、常にまともなことばかり言うようにせよ。そうすればお前たちの行為の(曲がったところ)は直して下さるし、犯した罪も赦して下さろう。とにかくアッラーと使徒の言いつけをよく守る人は、大成功に疑いない。」(コーラン 33:70-71)

讚えあれアッラー。預言者シュアイブ<sup>(注6)</sup>のお言葉を伝え給うた。「わしは、ただ及ばずながら世の中を正しくしたいと願っておるだけのこと。が、このわしの願いがかなうもかなわぬもアッラーの御心次第。すべてをおまかせ申し、改悛の心をもってお継り申しておる。」(コーラン 11:88)

讚えあれアッラー。次のように仰せになられた。「汝らは今まで人類のために生れ出た集団の中で最上のもの。汝らは義しいことを勧め、いけないことを止めさせようとし、アッラーを信仰する。」(コーラン 3:110)

アッラーの僕であり、アッラーの使徒である[ムハンマド]にアッラーの祝福と祈りがあらんことを。彼いわく。「違反を犯したのを見て、それをやめさせることができなければ、アッラーからの罰は免れぬ。」<sup>(注7)</sup>

イスラームの民が、シオニスト・十字軍連合およびその共犯者たちによって彼らに加えられた侵略、不法、不正に苦しめられてきたことは隠されるべきではない。その侵略や不正の結果、ムスリムの血はもっとも安価になり、彼らの富は戦利品として敵の手中に入ってしまった。彼らの血はパレスチナやイラクで流された。レバノンのカーナー<sup>(注8)</sup>での

虐殺の恐ろしい映像は依然としてわれらの記憶に新しい。タジキスタン、ビルマ、カシミア、アッサム、フィリピン、パッターニ、オガディン、ソマリア、エリトリア、チェチェン、ボスニア・ヘルツェゴビナでも虐殺は起きている<sup>(注9)</sup>。これらの虐殺は身体を震えさえ、良心を苛むものである。世界はこれらをすべて見聞きしているにもかかわらず、この暴虐に反応しない。それどころか、米国とその同盟者のあいだの露骨な陰謀により、不正なる国連を隠れ蓑にして、土地を奪われた民は自衛のための武器を取ることも許されないのである。

イスラームの民は覚醒し、自分たちがシオニスト・十字軍連合の侵略の主たる標的であることに気づいた。人権に関するあらゆる虚偽の主張や宣伝は、世界のいたるところにいるムスリムに対する虐殺によって、叩き壊され、暴かれたのだ。

これらの侵略行為のうち、預言者 アッラーの祝福と祈りがあらんことを の死以来、ムスリムに起きた最大最新のものはアメリカ十字軍とその同盟者による二聖モスクの地、イスラームの家の基礎、啓示の場、福音の源、聖なるカアバの場、全ムスリムの礼拝の方向の占領である。「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありませぬ』というのみ。」

現在の状況において、そして世界を、とりわけイスラーム世界を席卷する祝福された覚醒の旗のもとで、わたしは今日、みなさんと出会う。アメリカ主導の不正なる十字軍運動によりイスラームの学者や宣教師たちは長いあいだ沈黙を余儀なくされた。アメリカは、彼らイスラームの学者や宣教師たちが、イブ

ン・タイミーヤやイッズ・ブン・アブドゥッサラーム<sup>(注10)</sup>のような先達の学者たちアッラーが彼らを嘉し給わんことを がしたように、イスラームの敵に対しイスラーム共同体を煽動することを恐れている。したがって、シオニスト・十字軍連合は、誠実な学者たちや有能な宣教師たちを殺害したり、逮捕したりという手段に頼ってきた(われわれは彼らを賞讃したり、神聖化したりするつもりはない。アッラーのみがみずからお望みになるものを聖別され給う)。彼らは信仰戦士(ムジャーヒド)、シャイフ・アブドゥッラー・アッザーム<sup>(注11)</sup>を殺害し、信仰戦士、シャイフ・アフマド・ヤーシーン<sup>(注12)</sup>や(アメリカで)信仰戦士、シャイフ・ウマル・アブドゥッラフマーン<sup>(注13)</sup>を逮捕した。

アメリカの命令により、彼らは二聖モスクの地でも多くの学者や宣教師たち、若者たちを逮捕した。そのなかには著名なシャイフ・サルマーン・アウダやシャイフ・サファル・ハワリー<sup>(注14)</sup>およびその兄弟たちが含まれている。「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありませぬ』というのみ。」われわれ、わたし自身やわたしの組織自体も、この不正を蒙ってきた。われわれは、ムスリムたちに呼びかけることを禁じられ、パキスタン、スーダン、アフガニスタンで追われてきた。それゆえ、わたしは長いあいだ姿を見せられなかったのだ。しかし、アッラーのご加護により、今やホラーサーンのヒンドゥークシュの高い山やまで安全な基地を手に入れることができた。ここでは、アッラーのご加護により、世界最大の異教徒の軍が破壊された。そして、アッラーフ・アクバル(アッラーは至大なり)の信仰戦士たち

の叫びのまえに超大国の神話は朽ち果てた。

今日、われわれはこの同じ山やまから、シオニスト・十字軍連合によりイスラーム共同体(ウンマ)に加えられてきた不正を除去するために努力する。とりわけ、彼らが、エルサレムの祝福された土地、預言者 アッラーの祝福と祈りがあらんことを の夜の旅の道程、二聖モスクの地を占領してきた後である。われらアッラーに勝利をお願い申す。まこと彼はわれらの主にして、全能なるもの。本日、ここよりわれわれは、イスラーム世界、とくに二聖モスクの地に起きてきたことを正す方法について話し、議論することで任務を開始する。とりわけ、人びとの生活、宗教に甚大な被害と大いなる侵略があったあとであり、われわれは、現状を正しい方向に戻し、人びとにみずからの権利を回復させるために、われわれが従うべき方途について検討することを望む。民間人、軍人、治安関係者、政府当局者、商人、若者、老人、さらには生徒、学生たちなど、あらゆる人びとに不正が影響を与えている。卒業しても就職先のない数十万のものたちが社会のなかでもっとも広範な場所を占めつつあるが、彼らにも影響がおよんでいる。

不正は工業や農業に携わる人たちをも、そして都市や農村の人びとをも蝕んでおり、ほとんどすべての人たちが何らかについて不平をいっている。二聖モスクの地の状況は噴火寸前の巨大な火山と同様であり、[いったん噴火すれば]異教(クフル)や腐敗そしてその根源を破壊することになる。リヤードやフバルでの爆弾事件<sup>(注15)</sup>は、過酷な抑圧、苦難、極端な不正、屈辱、貧困の結果として現れる、この火山の噴火への警告である。

人びとは自分たちの日常生活に十全に関心を払っている。誰でもが経済の悪化、インフレ、増大しつづける負債そして囚人でいっぱいになった刑務所について話している。収入のかぎられた公務員は数万や数十万サウジ・リヤールの債務について話す。彼らは、リヤールの価値が大半の主要通貨のなかで大幅に下落しつづけると不平をいう。大商人やゼネコンは、政府が彼らに対し数億、数十億リヤールの負債を抱えていることについて述べている。政府は国民に対し3400億リヤールの借金を背負っており、さらに毎日の利子の支払いもあるし、対外債務もある。人びとは、自分たちが最大の石油輸出国なのか疑問に思っている。人びとは、この状況が、現体制の抑圧的で非合法的な行為、方法に対し反対しなかったために、アッラーが人びとに与えた呪いであるとさえ、考えるようになっている。[現体制の抑圧的な行動には]聖なるイスラーム法(シャリーア)を無視し、人びとから合法的な権利を奪い、アメリカ人に二聖モスクの地の占拠を許し、誠実な学者たちを投獄すること[などが含まれている]高潔なるウラマーや学者たち、そして商人やエコノミスト、この国の貴顕たちはみな、この破滅的な状況に注意を払ってきた。

状況を阻止し、正すためにすべての組織が迅速な努力を行ってきた。みな、この国が大きな惨劇に向かって突き進んでいるという点で合意している。その深淵はただアッラーのみが知り給う。ある大商人が注釈する。「国王は国家を66倍の惨劇に導いている。」「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありません』というのみ。」多くの王子たちは国民と感情を共有し、個人的には、

この国で起きている腐敗や圧政、脅しへの懸念や反対を表明している。しかし、個人的な利益のための有力王族間の争いで国家は破壊されてしまった。現体制は、その行動の進路により、そのレジテマシーを篡奪したのである。

- (1) イスラームのシャリーア法を停止し、人定法と入れ替えた。現体制は誠実なウラマーたちや公正なる若者たちとの流血の対立に入っている。「われわれは彼らを賞讃したり、神聖化したりするつもりはない。アッラーのみがみずからお望みになるものを聖別され給う。」
- (2) 現体制は国家防衛において無能であり、ウンマの敵であるアメリカの十字軍がもっとも長い年月土地を支配することを許した。十字軍部隊は、われわれの悲惨な状況　なかんずくその経済的な側面において　の主たる原因となった。これは、これらの軍事力に対する正当化できない膨大な支出のためである。とくに石油産業分野でこの国に強制された政策の結果、アメリカ経済に適するように、[石油の]生産は増減され、価格も定められる。この国の経済は無視されているのだ。武器購入のためこの国には高額な契約が課される。人びとは、それなら現体制が存続するための正当性とは何かについて問いはじめた。

状況を阻止し、危険を回避するため、個人や社会の異なる集団によっても迅速な努力が行われている。彼らは私的、公的に政府に忠告を与えている。彼らは手紙や詩、報告、忠

言を送り、町まちで調査を行い、彼らの改革や修正の運動にあらゆる有力者を徴募している。彼らは感情や儀礼、そして叡智を込めた方法で、大いなる過ちや腐敗を矯正する方法やそれらを悔悟することを求めている。[これらの過ちや腐敗は]宗教の基本的な原理や人びとの合法的な権利をも呑み込んできたのである。

しかし、残念ながら、現体制は人びとの話を聞くことを拒否し、彼らが馬鹿げていて、愚かであると非難した。従来悪行にさらに大きな過ちが加えられ、事態はさらに悪化する。これらはすべて二聖モスクの地で起きているのである。これ以上黙っていることはできない。この問題を黙視することはもはや受け入れがたいのだ。

このような違反行為が最高レベルにまで到達し、イスラーム的原理の存在そのものを脅かす破壊力へとかわると、数百人の引退した官僚や商人、有名人、知識人によって支持された学者たちのグループが国王に対し改革の実行を要請する書簡を書き送った。ヒジュラ暦1411年(1991年5月)、湾岸戦争のときの有名なシャウワール月書簡と呼ばれる書簡が400以上の署名をつけて王のもとに送られた。これは抑圧の中止と改革の実行を要求するものであった。国王はこれらの人びとに屈辱を与え、書簡の内容を無視することを決めた。国家の状態は非常に悪かったが、それがさらに悪化してしまった。しかし、人びとは何度も書簡や建白書を送ろうとした。とくに栄光ある『忠言覚書』はヒジュラ暦1413年(1992年7月)に国王に手交された。これは、病気を特定し、独自の正しい科学的なやりかたで治療法を記述したものであった。『忠言覚書』

は現体制の哲学における陥穽や欠点を描写し、必要な行動や治療法を示唆していた。『覚書』には次のような描写がある。

- (1) 社会の指導層、学者たち、部族長、商人、教員、その他の貴顕たちが蒙っている脅しや嫌がらせ。
- (2) 国家内での法の状況とアッラーによって定められたシャリーアを無視した、許されるもの(ハラール)と禁じられるもの(ハラーム)の恣意的な宣言。
- (3) 事実を隠蔽し、情報を歪曲する道具となった報道およびメディアの状況。メディアは、人びとを宗教から乖離させるため、一部の人物を偶像化し、信徒のあいだに醜聞を撒き散らすという敵の計画を実行した。至高なるアッラーは仰っている。「醜聞が信徒の間に広まるのを見て喜んでいるような者どもは、苦しい罰を蒙ることになる、現世でも来世でも。」(コーラン 24:19)
- (4) 虐待と人権の蹂躪。
- (5) 国家の財政的・経済的状況と政府のもつ債務と利子の巨額さから見た恐ろしい未来。これは、国民に対しより多くの関税や税金が課せられながら、ウンマの富が一部の個人の私的な欲望を満足させるために消費されているということである。{預言者は姦通を犯した女性に関し次のように述べている。「彼女は、徴税人を赦すのに十分な方法で後悔した。」}<sup>(注16)</sup>
- (6) 社会サービスおよび社会基盤、とくに生活の基本である水の供給の悲惨な状況。
- (7) 軍に信じられないような金額が費やされているにもかかわらず、軍の訓練および

び準備状況は悪く、しかも総司令官が無能であること。

- (8) シャリーアが停止され、代わりに人定法が使用されている。
- (9) 外交に関して、『覚書』は、外交がイスラーム問題をいかに軽視しているか、ムスリムたちを無視しているかだけでなく、ムスリムの敵に対して支持と支援と支持が与えられているかを明らかにしている。ガザ・エリコや南イエメンの共産主義者のケースは依然として記憶に新しいし、それ以外のことをいうこともできる。

知識の民によって述べられているように、シャリーアの代わりに人定法を使用し、ムスリムに対して異教徒を支援することは、人からそのイスラーム的地位を奪う（ムスリムをムシュリク 多神教徒 にかえる）ことになる10の大罪に属している。全能のアッラーは仰っている。「せっかくこういうものを戴いておりながら、結局彼らは背いてしまう。すなわち彼らは本当の信者ではない。」（コーラン 5:43）さらに「いや、いや、神かけて。彼らがお互い同士の揉め事にもお前の裁決を頼み来るようであれば、彼らはまだ本当の信者ではない。だがもしそうなったら、お前の下す判決に不満のあろう筈はなし、絶対服従あるのみじゃ。」（コーラン 4:65）

『覚書』が柔らかな言葉、丁寧な書きかたで、アッラーを想起させ、実直で誠実な忠告を与えているにもかかわらず、またイスラームにおける忠告の重要性が国民に責任を有するものにとって絶対に本質的なものであるにもかかわらず、支持者はもちろんのことこの

文書に多数の署名者がいたにもかかわらず、これらはみな『覚書』にとって取りなしにはならなかった。その内容は拒否され、署名したものと同調者たちは馬鹿にされ、旅行を禁じられたり、罰せられたり、また投獄されたものすらいた。

したがって、矯正と改革の唱道者たちが、国家の統合を守り、流血を避けるために、きわめて真摯に平和的手段を用いたことは明らかである。では、現体制はなぜすべての平和的な道を閉ざし、人びとを武力行使に向けたのであろうか。[武力行使は]正義と公正を履行するために彼らに残された唯一の選択であった。スルターン王子<sup>(注17)</sup>とナーイフ王子<sup>(注18)</sup>が、あらゆるものを破壊する内戦へと国家を追いやるのは誰のためであろうか。なぜ、改革運動を挫折させるため、国内の対立に火をつけ、人びとを対立させ、国家の息子である警察を煽動するものの意見を聞くのか。ウンマの財政的・人的資源を搾取するため、敵の政策を履行する、こうした裏切りものたちに平和と治安をゆだね、域内の主たる敵であるアメリカ・シオニスト連合に平和と治安を享受させていいのだろうか。

ナーイフ王子 内相 の顧問（ザキー・バドル元エジプト内相）は自分の祖国でも受け入れられなかった。彼は、エジプトで自国民に対する汚れた態度と攻撃のため、その職を解かれたにもかかわらず、ナーイフ王子には、罪と攻撃を支援するために温かく受け入れられたのである。彼は不正にも刑務所をこのウンマの最良の息子たちで満たし、彼らの母たちを嘆き悲しませた。現体制は、一部の近隣諸国で起きたように、市民を軍人に対して、また軍人を市民に対し弄ぶことを望んで

いるのだろうか。これがアメリカ・イスラエル連合の政策であることは疑いない。なぜなら彼らこそがこの状況で得をする第一のものだからである。

しかしながら、アッラーのご加護により、民間人であれ、軍人であれ、国民の大多数は、邪な策略に気づいている。彼らはたがいに弄ばれるのを拒否し、現体制によりアメリカ・イスラエル連合の政策をわが国におけるその代理人であるサウード家体制を通じて履行する道具となることを拒否した。

したがって、問題の根源に取り組まないかぎり、状況を矯正することはできないこととみな合意している（棒の影は、棒を真っ直ぐにしないかぎり、真っ直ぐにはならない）。それゆえ、ウンマを小さな国家に分断し、過去数十年にわたり、混乱状態に押しやっていた主たる敵を打つことが肝要である。シオニスト・十字軍連合はイスラーム諸国に出てきた改革運動を封じ込め、挫折させるため迅速に動いた。その目的を達成するために、さまざまな方法が取られている。あるときは、「運動」はあらかじめ決められた、好ましからざる時と場所で武装闘争に引き摺りこまれ、またあるときは、シャリーア学部の卒業生でもある内務省の役人が駆り出される。彼らは、国民とウンマを（間違ったファトワーで）誤解、混乱させたり、運動に関して誤った情報を流したりするのだ。さらに別の場合には、一部の誠実な人たちが騙されて、ウラマーや運動の指導者たちに対する言葉の戦いに引き込まれ、些細な問題の議論で国民のエネルギーを浪費し、アッラーの聖法のもと人びとを統合するという大きな問題を無視させるのである。

このような議論の影で、真実が虚偽によつ

て覆い隠され、人びとのなかに生み出された個人的な対立や党派心がウンマをさらに分断させ、より弱体化させてしまう。イスラームにおいてなすべきことの優先順位は失われ、冒瀆と多神教がウンマを掌握し、支配しつづける。われわれは内務省によって実行されている残虐な計画に注意を払わねばならない。正しい答えは、イブン・タイミーヤ<sup>(注19)</sup>

アッラーが彼を嘉し給わんことを が述べたように、知識の民によって決定されてきたことに従うことである。[イブン・タイミーヤいわく]「イスラームの民は、イスラーム世界の国ぐにを支配している主たる不信仰を除去するために力をあわせ、たがいに協力しなければならない。大いなる不信仰を除去するためであれば、[その不信仰からもたらされる被害よりも]小さな被害には耐えなければならない。」<sup>(注20)</sup>

もし実行すべき義務が複数あるのであれば、まずもっとも重要なものを優先すべきである。信仰（イーマーン）について重要な義務が、敵であるアメリカ人を聖地から駆逐すること以外にはありえないことは明らかだろう。信仰を除けば、それ以上に優先されるものは考えられない。知識の民、イブン・タイミーヤは述べる。「宗教と信仰を守るために戦うことは『集合的義務』であり、信仰につぐものとして、生活と宗教を腐敗させている敵と戦う以外の義務はない。この義務にはいかなる前提条件もない。敵とは最大限の能力を使って戦わねばならない。」（『ファトワー集補遺』参照）<sup>(注21)</sup>もし、ムスリムの集合的な運動を除いて、敵を撃退することが不可能ならば、ムスリムにとって自分たちのなかでの小さな対立を無視することは義務である。一定期間

これらの対立を無視することの悪影響は、主たる不信仰によるムスリムの土地の占領からもたらされる悪影響よりも小さいものである。イブン・タイミーヤはこの問題について解説し、小さな脅威を犠牲にして大きな脅威に立ち向かうことの重要性を強調した。彼はムスリムと信仰戦士たちの状況を描写し、イスラームを実践していない軍人であっても敵に対する聖戦（ジハード）の義務を免れることはない」と述べている。

イブン・タイミーヤはモンゴル人（タタル人）とアッラーの法を変える彼らの行動について言及したのち、次のように述べている。「アッラーを喜ばせ、そのお言葉を高め、その宗教を確立し、その使徒 神の祝福と祈りがあらんことを に従うことの究極の目的はあらゆる側面で完璧な方法で敵と戦うことである。戦わないことからくる宗教への危険が戦うことのそれよりも大きいなら、たとえ一部の戦士たちの意図が、出世を求めるといふふうに、純粋でなくとも、また彼らがイスラームの一部の規則や戒律を守らなくとも、戦うことは義務である。二つの危険のうち、小さなほうを犠牲にして大きなほうを駆逐することはイスラームの原理であり、守られねばならない。正しいものと正しくないものがともに戦うのはスンナの民の伝統である。預言者 神の祝福と祈りがあらんことを が述べているように、アッラーは正しいものと正しくないものによってこの宗教をお支えになる。正しくない兵士や司令官の支援なしに戦うことができないのなら、二つの可能性がある。戦いを無視して、現世と宗教にとって大いなる危険である相手が支配するか、正しくない支配者の支援を得て戦い、二つの危

険のうち大きなほうを駆逐して、イスラームの法の すべてではないにしろ 大部分を履行するかの二つの可能性である。後者の選択肢はこうした条件、そして他の同様な状況のもとでは、正しい義務となる。実際、正統カリフ時代以降に起きた戦闘および征服の多くはこの型であった。」（『ファトワー集』26 /506）<sup>(注22)</sup>

目が見えずとも、耳が聞こえずとも、被害が幅広く拡大し、大罪が広くいきわたっていることは誰にも否定できない。その結果、すでに多神教の深刻な不正に到達し、主権と立法というアッラーのみが有する権利をアッラーとわかちあうまでになっている。全能者いわく。「さてそのルクマーン<sup>(注23)</sup>がまた自分の息子を誡めてこう言ったことがある、『これ、わが子よ、お前、アッラーと一緒にほかの（邪神）を拝むようなことをしてはなりません。多神に仕えるということほど世にけしからんことはない』と。」（コーラン31:13）人間がでっちあげた法律が持ち出され、高利（リバー）のようにアッラーによって禁じられたことが赦されるようになっていく。高利をあつかう銀行が、二聖モスクの地で競いあい、アッラーの命令に従わず、アッラーに宣戦を布告している。「アッラーは商売はお許しになった、だが利息取りは禁じ給うた。」（コーラン2:275）これはみな聖地の聖モスクの周辺で起きていることである。アッラーはコーランのなかで高利で商うムスリムに対する比類なきお約束（他のいかなる罪びとも約束されたことはない）について仰せられた。「これ、信徒の者、アッラーを畏れかしこめよ。またとどこおっている利息は帳消しにせよ、汝らが本当の信者であるならば。だがも

し汝らそれがいやだと言うのなら、よいか、アッラーとその使徒から宣戦を受けるものと心得よ。」(コーラン 2:278-279) これぞ、(罪であると信じながら) 高利で商う「ムスリム」のためのもの、では、アッラーによって禁じられたもの(高利などの罪)を合法化し、みずからをアッラーと並べるものはどうなるのか。上述のすべてのことにもかかわらず、われわれは、政府が一部の正しいウラマーや宣教師たちに道を過たせ、罪や不信仰を拒絶することから引き離そうとしているのを見出す。「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありませぬ』というのみ。」

このような状況下においては、大いなる不信仰である敵を国から排除することは主要な義務となる。信仰以外で、これ以上に重要な義務はほかにない。二聖モスクの地および預言者の最遠のモスク(アクサー・モスク)への道程を占領しているアメリカ・イスラエル連合という敵に対しウンマを準備させ、唱導するために最大限の努力が行われなければならない。またムスリムたちに、自分たちの内輪の戦いにかかずらっている場合ではないことを想起させねばならない。このようなことは次のような深刻な事態を招くことになろう。

- (1) ムスリムの人的資源の消耗。大半の死傷者、犠牲者はムスリムから出る。
- (2) 経済的・財政的資源の浪費。
- (3) 国家の社会基盤の破壊。
- (4) 社会の分裂。
- (5) 石油産業の破壊。アメリカの十字軍部

隊がイスラームの湾岸諸国の陸海空に駐留していることは世界最大の石油埋蔵を危機にさらす最大の危険である。域内にこれらの軍が駐留するのは国民を怒らせ、彼らの宗教、感情、誇りへの攻撃を誘発させ、領土を占領した侵略者に対する武装蜂起へと彼らを追い込むことになる。したがって、域内での戦闘の拡大が石油の富を燃やしてしまう危険がある。湾岸諸国および二聖モスクの地の経済権益は被害を受けるが、世界経済にはより大きな被害が出るだろう。わたしはここで、わが兄弟たる信仰戦士(ムジャーヒド)たち、国家の息子たちに、この[石油の]富を守り、戦闘に巻き込まないように警告したい。それは偉大なるイスラームの富であり、アッラーのお赦しと恩寵により近い将来建設されるであろうイスラーム国家にとって欠くことのできない経済力となるからである。われわれはまた侵略者であるアメリカにもこのイスラームの富を焼失したりしないよう警告する。(これは、彼らが、終戦時に犯しかねない犯罪である。なぜなら彼らは[石油が]その合法的な所有者の手に落ちないように、また、域内の石油の主要な消費者であるヨーロッパや極東とくに日本におけるアメリカの競争相手に経済的な打撃を与えるため[石油に火を放ちかねない]からである。)

- (6) 二聖モスクの地の分断とイスラエルによるその北部の併合。二聖モスクの地の分断はシオニスト・十字軍連合の本質的な要求である。アッラーの恩寵により、将来のイスラーム国家の指導のもと、このような巨大な資源をもった大国が存在

するようなことになれば、パレスチナにおけるシオニスト国家の存在そのものに対し深刻な脅威となる。高貴なるカアバ、全ムスリムのキブラは二聖モスクの地をイスラーム世界の統一の象徴にしている。さらに世界最大の石油埋蔵量があることは、二聖モスクの地をイスラーム世界における重要な経済大国にする。二聖モスクの地の息子たちは彼らの先祖である教友たち アッラーが彼らを嘉し給わんことを シーラの生きざま(シーラ)と直接に結びついている。彼らは先祖たちのシーラをウンマの栄光を再建し、ふたたびアッラーのみ言葉を高くかかげるための源泉であり、実例であると考え。さらに南イエメンにアッラーの大義のために戦う戦士たちが多数存在することも域内におけるシオニスト・十字軍連合にとって戦略的な脅威である。預言者 アッラーの祝福と祈りがあらんことを いわく。「約12000人がアデン・アブヤンから現れ、アッラーとその使徒の大義を支援するだろう。彼らはわたしと彼らのあいだの時代の最良のものである。」これは真正で信頼できる経路をもってアフマド<sup>(注24)</sup>により伝えられたものである。

- (7) 内戦は、たとえどんな理由があるにせよ、大きな間違いである。占領者であるアメリカ軍の存在は戦闘の結果を国際的な不信仰の利益のために利用するであろう。

さて、わたしはここで治安機関、軍隊、国家防衛隊にいるわが兄弟たち アッラーがあなたがたをイスラームおよびムスリムたち

のための保管場所とされんことを に訴える。あなたがた、統合の保護者にして、信仰の守護者たちよ。導きの光をかかげ、それを全世界に広めた先祖たちの子孫よ。サアド・ブン・アビーワッカース、ムサンナー・ブン・ハーリサ・シャイバーニー、ジャアジャア・ブン・アムル・タミーミー<sup>(注25)</sup>そして彼らとともにジハードを戦った敬虔なる教友たちの孫たちよ。あなたがたは、アッラーのみ言葉を高くかかげアッラーの道のジハードを実行するため、そしてイスラームの信仰と二聖モスクの地を侵略者や占領軍から守るために、軍や防衛隊へと参加したはずだ。それはこの宗教(ディーン)を信じる究極の段階である。しかし、現体制はこれらの原則や彼らの理解を捻じ曲げ、ウンマに屈辱を与え、アッラーに逆らった。半世紀前、支配者たちはウンマに最初のキブラ<sup>(注26)</sup>を奪還することを約束した。しかし、50年後、新しい世代となり、約束は反故にされた。アクサー・モスクはシオニストの手に渡り、そこにあるウンマの傷からは依然として血が流れている。ウンマが最初のキブラ、預言者 アッラーの祝福と祈りがあらんことを の夜の旅の道程を奪還できなかったとき、上述のことにもかかわらず、サウジ現体制は、体制を守るためにキリスト教徒の軍隊を呼び寄せることにより、ウンマを、残った聖域であるマッカという聖なる町および預言者モスクに押しとどめてきた。十字軍は二聖モスクの地に駐留することを許可された。とはいえ驚くにはあたらない。国王自身がその胸に十字架をつけているのだ。国家は北から南、東から西と十字軍に広く開かれた。土地はアメリカおよびその同盟国の軍事基地で満たされた。現体制はウンマを裏

切り、不信仰（クフル）の側につき、ムスリムに敵対して彼らを助け、支援したのである。よく知られているように、これは、イスラームの地位を剥奪される10の大罪のうちのひとつである。十字軍に対しアラビア半島を開くことで、現体制は、神の使徒 アッラーの祝福と祈りがあらんことを が死の床で申しつけたことに従わず、逆らったのである。[預言者は臨終の席で次のように述べた。]「多神教徒をアラビア半島から追放せよ。」（ブハーリーの『ハディース集』より）<sup>(注27)</sup> また「もしアッラーのご加護で生き延びたら、わたしはアラビア半島からユダヤ教徒とキリスト教徒を駆逐するだろう。」<sup>(『小真正集成』)</sup><sup>(注28)</sup>

十字軍の駐留が二聖モスクの地を[イラクの侵略から]防衛するための臨時的な措置にすぎないという主張は、とくに、イラクの民間および軍事的基盤が残虐に破壊された今となっては、もはや無意味であり、容認できない。[この破壊は]シオニスト・十字軍がいかにムスリムおよびその子どもたちを嫌悪しているか、そしてその嫌悪がいかに深いかを示しており、十字軍部隊をサウジアラビアなどのムスリムの息子たちからなるイスラームの軍隊と入れ替えるという考えも拒否されている。さらに、その主張の根拠および主張そのものがアメリカの不信仰者の指導者たちによる一連の演説によって崩され、消されている。そのもっとも最近のものはウィリアム・ペリー国防長官<sup>(注29)</sup>がフバルでの爆破事件後に行った演説である。彼は、フバルにおけるアメリカ軍兵士の駐留がアメリカの権益を守るためであると述べている。投獄されているシャイフ・サファル・ハワーリー アッラーがその釈放を早めんことを は70ページの

本を執筆し、そのなかで、アメリカ人のアラビア半島駐留があらかじめ計画された軍事的占領であることの証拠を提示している<sup>(注30)</sup>。パレスチナの兵士たち、信仰戦士（ムジャーヒド）たちが欺かれ、アクサー・モスクを失ったときと同じように、現体制はムスリムたちを欺こうとしている。ヒジュラ暦1304年（西暦1936年）、パレスチナの覚醒したムスリム国民はイギリスの占領軍に対する偉大なる闘争、ジハードを開始した<sup>(注31)</sup>。イギリスは、ムジャーヒドたちや彼らのジハードをとめることはできなかった。しかし、彼らの悪魔は、パレスチナにおける武装闘争をとめるには、彼らの代理人である[サウジアラビア初代国王]アブドゥルアジーズ国王が何とかムジャーヒドたちを欺くことを通じて以外にはできないと吹き込まれた。アブドゥルアジーズ国王はイギリスの主人に対する義務を果たした。彼は自分の2人の息子を派遣してムジャーヒドの指導者たちと会見させ、彼らにアブドゥルアジーズがイギリス政府の約束を保証すると知らせたのである。[イギリスの約束とは]もし彼らがジハードを中止すれば、その地域を離れ、ムジャーヒドたちの要求にも積極的に対応するというものであった。そして、アブドゥルアジーズ国王はムスリムたちの最初のキブラを失う原因となったのである。国王はムスリムに対する十字軍に加わった。アッラーのためのムジャーヒドたちを支援し、アクサー・モスクを解放するかわりに、ムスリムたちを失望させ、侮辱したのだ。

今日、彼の息子であるファハド国王は、聖域に残されたものを失わせるため、ふたたびムスリムたちを欺こうとしている。イスラーム世界が二聖モスクの地に十字軍の軍隊が到

着したことを後悔しているとき、国王は（アメリカ人の到来に関するファトワーを發布した）ウラマーたち<sup>（注32）</sup>やマッカで開催された世界イスラーム連合の会議に集まったイスラームの指導者たちに対し嘘をついた<sup>（注33）</sup>。国王は「問題は単純だ。アメリカおよび同盟国の軍隊は数カ月で域内から去るだろう」と述べた。現在、彼らの到着からすでに7年が経過している。現体制は彼らを国土から追い出すことはできないのだ。現体制は、その無能ぶりについて弁明をしていないし、アメリカ人は去ると述べ、人びとを騙しつづけている。しかし、けっして、信仰者は同じ穴に落ちたり、同じ蛇に咬まれるようなことはない。まこと他者の悲しい経験に注意を払うものは幸いである。

占領者に反対するよう軍隊、防衛隊、治安当局者に動機づけを与えるかわりに、現体制は彼らを侵略者防衛のために利用し、侮辱と裏切りを強めてきた。「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありません』というのみ。」軍や警察、治安部隊のなかの小さなグループが現体制に騙され、その圧力を受けてムスリムを攻撃し、彼らの血を流してきた。われわれは彼らに次のような話を想起させよう。「わたし〔預言者ムハンマド〕は、わたしの友人たちを敵とするものと戦うことを約束する」はブハーリーによって伝えられている<sup>（注34）</sup>。また〔預言者〕アッラーの祝福と祈りがあらんことをいわく。「最後の審判の日、ある男が他のものを引き連れてやってきて、その男に殺された」と文句をいった。アッラー その名前が高められんことを はお尋ねになった。『なぜお前は彼を殺したのだ。』すると、告発さ

れたものは答えた。『わたしは、すべての賞讃があなたさまにあれかしとそういたしました。』アッラー その名前が高められんことを は仰せになられた。『まことあらゆる賞讃はわしのものだ。』今度は別の男が4番目の男を連れてやってきて、似たような文句をいった。アッラー その名前が高められんことを はお尋ねになった。『お前はなぜその男を殺したのだ。』告発された男は答えた。『賞讃が何某のためにあれと思ってそうしました。』アッラー その名前が高められんことを は仰せになられた。『賞讃はわしのものであり、何某のものではない。殺された男の罪も背負い（地獄の業火に落ちるがよい）。』<sup>（注35）</sup> ナサーイーの伝える別の言葉では「告発されたものは『何某の支配あるいは王国を強めるために』と述べた」となっている<sup>（注36）</sup>。

今日、あなたがたの兄弟たちと息子たち、二聖モスクの地の息子たちはアッラーの大義のためのジハードを開始している。このウンマの栄光を再建し、占領された聖域を解放するため、あなたがたがこの使命を実行したがつていることにも疑いはない。しかしながら、われらの軍事力と敵の軍事力のあいだの非対称のため、適切な戦闘方法を取らねばならないことは明らかであろう。すなわち、極秘で動くことのできる迅速な軽装備の軍である。いいかえれば、ゲリラ戦を開始せよということだ。国家の息子たちよ、軍隊ではない。ゲリラ戦に参加せよ。ご存じのとおり、現状では軍隊は十字軍の敵軍隊と通常の戦争に従事しないほうが賢明である。（例外は軍メンバー個人による勇敢で強力な作戦である。これは通常の形式による公式の軍の動きがなく、強烈

な反撃が軍に向けられることはないからだ。だが、大きな利点が達成できる見込みがあり、敵側に大損害が与えられるなら（これはその基礎や社会基盤を揺るがし、破壊することになる）、[正規軍が通常の戦闘を行い] 敵を敗走させ、国から駆逐する支援になるだろう。

あなたがたの兄弟であり、息子であるムジャーヒドたちは、あなたがたが、必要な情報や物資、武器を提供することなど、あらゆる可能な手段をもって彼らを支援することを求めている。治安当局者はとりわけ、ムジャーヒドたちを匿い、敵軍に対しできるかぎり彼らを助け、敵軍のなかに噂や恐怖、落胆を振りまくよう求められている。

われわれは、現体制が、ムジャーヒドたちとあなたがたのあいだに対立や紛争を惹起しようとして、治安当局者、防衛隊、軍隊の兵士たちに対し計画的な行動をとり、それをムジャーヒドたちのせいにする可能性について、あなたがたに注意を喚起する。現体制がそのような機会を利用できるようにしてはならない。

現体制は、国家あるいは国民によって引き起こされてきたことに完全なる責任を負う。しかし、アメリカ占領軍こそが現状の原理であり、主たる原因なのだ。したがって、アッラーのご加護により、敵が完全に打ち破られるまで、彼らを破壊し、彼らと戦い、彼らを殺害することに努力を傾注すべきである。アッラーのお許しにより、あなたがたが決定的な役割を果たすことができる 때가やってくる。そのとき、アッラーのみ言葉は至高のものとなり、異教徒たち（カーフィルーン）のそれは低劣のものとなる。あなたがたは侵略者に鉄拳を見舞うことになる。あなたがた

は正しい道を再建し、人びとにその権利を賦与し、真にイスラーム的な義務を履行することになる。アッラーがお望みになれば、これらの問題について別の話をしよう。

わがムスリムの兄弟たちよ（とくにアラビア半島の兄弟たちよ）、

あなたがたがアメリカ製品を買うために支払う金は銃弾へと変えられ、パレスチナにおけるわが兄弟たちに対して、そして明日（未来）には二聖モスクの地のわが息子たちに対して使用される。これらの製品を買うことでわれわれは彼らの経済を強化し、逆にわれわれの搾取や貧困を増加させているのだ。

二聖モスクの地のムスリムの兄弟たちよ、

信じがたいことに、わが国はアメリカからの武器購入で世界最大であり、アメリカの通商上のパートナーとしても域内最大である。アメリカ人はパレスチナの占領やパレスチナでのムスリムの追いたてや殺害で、武器や人材や財政支援を与え、シオニストの兄弟たちを助けているのだ。

わが国との貿易からあがる巨額の収入を占領者たちに与えないようにすることは、彼らに対するわれわれのジハードにとって非常に重要な支援となる。われわれの彼らに対する怒り、嫌悪を示すことは非常に重要な道徳的行為である。そうすることによって、われわれは、われわれの聖域から十字軍やシオニストを除去し、アッラーのお許しにより、彼らを失望させ、敗北させながら強制退去させる（過程）に参加することができる。

われわれは、二聖モスクの地や他国の女性たちがアメリカ製品をボイコットすることで自分たちの役割を果たすことを期待する。

もし、経済的なボイコットにムジャーヒドたちの軍事作戦が合わされば、敵を敗北させることは、アッラーのお許しにより、近くなるであろう。しかし、ムスリムたちが彼らのムジャーヒドの兄弟たちと協力せず、支援も行わないならば、実際のところ彼らは敵軍に財政支援を与え、戦争を拡大し、ムスリムの苦難を増加させていることになるのだ。

世界中のどんな治安・諜報機関であっても、市民に敵の製品を無理やり購入させることはできない。アメリカ製品の経済的ボイコットは、敵に打撃を加え、弱体化させる非常に有効な武器であり、これは現体制の治安部隊の監督下にないことである。

わたしの話を終えるまえに、イスラームの若者たち、ムハンマド 神の祝福と祈りがあらんことを のウンマの輝かしい未来の人びとに対する重要なメッセージがある。われわれは、若者たちとウンマの歴史上のこの困難な時期における彼らの義務について話した。この時代においては、若者だけが変化するさまざまな義務を履行するために前進することができる。一部の著名人たちがイスラームを防衛し、政府による不正、攻撃、テロから自分自身やその富を救うという彼らの義務に躊躇してきたが、若者たち 神が彼らを守らんことを は前進し、イスラームの聖域を占領するアメリカ・シオニスト連合に対するジハードの旗をかかげてきた。この物質主義的な世界を愛するよう騙されてきたものたち、また政府によって嚇されてきたものたちは最悪の裏切り、二聖モスクの地の占領を

合法化することを選んだのだ。「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありませぬ』というのみ。」われわれはあなたがた若者たちの行動で驚くことはない。若者たちはムハンマド 神の祝福と祈りがあらんことを の教友である。このウンマのファラオであったアブージャフル<sup>(注37)</sup>を殺したのも若者ではなかったか。われらの若者たちは最良の祖先たちの最良の子孫なのである。

アブドゥッラフマーン・ブン・アウフ<sup>(注38)</sup>

アッラーが彼を嘉し給わんことを いわく。「わたしがバドルにいたとき、2人の若者が、1人はわたしの右に、もう1人はわたしの左にいたことに気づいた。彼らの1人が(他人に聞かれぬよう)わたしに静かに尋ねてきた。『おじきよ、アブージャフルがどれかおれに教えてくれ。』アブドゥッラフマーンは『彼をどうしたいんだ』というと、少年は答えた。『アブージャフルが神の使徒を虐待したと教えられた。おれの命をその手にもつアッラーに誓って、もしアブージャフルを見かけたら、おれたちのどちらかが死ぬまで、おれの影をあいつの影から離させない。』アブドゥッラフマーンいわく、『わたしは驚いた。それからもう1人の若者が最初の若者と同じことを尋ねてきたのだ。その後、わたしは人びとのなかにアブージャフルがいたのを見つけたので、少年たちに『見えるか。これが、おまえたちがわしに尋ねた男だ』といった。2人の若者は剣でアブージャフルを切り、彼を殺した』と。」アッラーは偉大なり。讃えあれアッラー。年若い2人の若者であったが、忍耐強く、熱意と勇気、そしてアッラーの宗教に対する誇りがあった。2人と

も敵に対して誘発されるべき殺人というもっとも重要な行為について尋ねている。これがこのウンマのファラオであり、バドルの戦いで多神教徒（ムシュリク）側の指導者であったアブージャフル殺害である。アブドゥッラフマーン・ブン・アウフ　アッラーが彼を嘉し給わんことを　の役割は2人の若者をアブージャフルの方向に向けたことである。これが当時の若者の忍耐であり熱意であり、彼らの父たちの忍耐であり、熱意であった。今、敵と戦う技術や知識をもった人びとに求められているのはこの役割である。彼らは彼らの兄弟や息子たちをこのように導いていかねばならない。いったんこれがなされれば、われわれの若者たちは、かつて彼らの祖先たちが述べた「アッラーに誓って、もしアブージャフルを見かけたら、おれたちのどちらかが死ぬまで、おれの影をあいつの影から離さない」という言葉を繰り返すだろう。

またアブドゥッラフマーン・ブン・アウフのウマイヤ・ブン・ハラフに関する話は、不信仰の頭を殺害するピラール<sup>(注39)</sup>　神が彼を嘉し給わんことを　の粘り強さを示している。「不信仰の頭はウマイヤ・ブン・ハラフだ。もしやつが生き残っているなら、おれは生きていられない」とピラールは述べた。

数日前、十字軍のアメリカの国防長官が「リヤードとフバルの爆弾事件からひとつの教訓を得た。卑怯なテロリストに攻撃されても退かないということだ」と述べたと通信社が伝えていた。

国防長官にいおう。この話は、嘆き悲しむ母親を笑わせるものであり、おまえた全員を蔽っている恐怖を示している。おまえたこのこの偽りの勇気は、1983年（ヒジュラ暦1403

年）にベイルートで爆弾が爆発したとき、どこにあったのだ。おまえたは穴だらけでこなごなにされ、241人の海兵隊を中心とする兵士たちが死亡した。そして、二つの爆弾が爆発し、24時間以内におまえたがアデンを去っていったとき、この勇気はどこにあったのだ。

しかし、おまえたのもっとも屈辱的な事件はソマリアにおいてであった。アメリカの力と新世界秩序におけるアメリカの冷戦後のリーダーシップに関して活発な宣伝があったのち、おまえたは2万8000人のアメリカ兵を含む数万人の多国籍軍兵士をソマリアに進攻させた。しかし、小さな戦闘で数十人の兵士が殺され、1人のアメリカ人パイロットがモガディシオの街頭に引きずり出されると、おまえたは失望、屈辱、敗北そしておまえたの死者を連れてその地を去っていったのである。クリントンは全世界のまえに現れ、威嚇し、報復を約束した。しかし、これらの威嚇は単なる撤退の準備にすぎなかった。おまえたはアッラーによって屈辱を与えられ、撤退したのだ。おまえたの無能さ、弱さは非常に明白になった。ベイルート、アデン、モガディシオという三つのイスラームの都市でおまえたが敗北したのを見ることは、すべてのムスリムの「心」にとって喜びであり、信じる民族の「胸」にとっては治療でもあった。

わたしは国防長官にいう。二聖モスクの地の息子たちはアフガニスタンでロシア人と、ボスニア・ヘルツェゴビナでセルビア人と戦うために出ていった。そして今日、彼らはチェチェンで戦い、神のお許しにより、おまえたの仲間であるロシア人に対し勝利を収めてい

る。アッラーの命令により、彼らはタジキスタンでも戦っている。

わたしはいう。二聖モスクの地の息子たちは、全世界での不信仰者たち(クッフアル)との戦い(ジハード)が絶対に必要であると感じ、強く信じている。彼ら自身の土地、彼らの誕生の地で戦い、彼らの聖域である高貴なるカアバ(全ムスリムのキブラ)を守ることに関しては彼らはより熱狂的で、より強力で、数もより多い。彼らは、世界のムスリムたちが勝利まで彼らを助け、支えてくれることを知っている。彼らの聖域を解放することはすべてのムスリムにかかわる最大の問題であり、現世におけるすべてのムスリムの義務なのである。

わたしはおまえにいおう、ウィリアム(国防長官)よ。これらの若者は、おまえが生を愛するのと同じように、死を求めている。彼らは、尊厳、誇り、勇気、寛大さ、誠実さ、犠牲的精神を先祖代々受け継いでいる。彼らは戦争においてはもっとも強力であり、堅固なものである。彼らはこれらの価値観を彼らの先祖たちから(イスラーム以前のジャーヒリヤ時代からも)受け継いでいる。これらの価値観はイスラーム到来によって認められ、完成させられた。アッラーの使徒 神の祝福と祈りがあらんことを いわく。「わたしはよき価値観を完成させるために遣わされた」と(『小真正集成』)<sup>(注40)</sup>。

異教の王、アムル・ブン・ヒンドが同じ異教のアムル・ブン・クルスームを侮辱しようとしたとき、後者は王の首を剣で切断し、攻撃や侮辱、憤怒を拒絶したのである<sup>(注41)</sup>。

王の抑圧が度を越せば、

われら屈辱に甘んじるのを拒否する。  
いかなる命により、アムル・ブン・ヒンドよ、

われらを貶めようとするのか。  
いかなる命により、アムル・ブン・ヒンドよ、

われらの敵に耳を貸し、われらに無礼を働くのか。

われらの不屈さは、アムルよ、  
おまえのまえで敵を疲弊させ、屈服することなし。

われらの若者たちは死後の樂園を信じている。彼らは、戦闘への参加がその日を近くしないことも、とどまっていたからといってその日が遠くならないことも信じている。アッラー いと高くあれ は述べ給うた。「誰ひとり、定めの時が来て、アッラーのお許しを戴いてでなければ死ぬわけには行かぬ。」(コーラン 3:145) われらが若者たちはアッラーの使徒 神が祝福と祈りを与えんことをの次のような言葉を信じる。「少年よ。いくつかの言葉を教えよう。アッラー(の大義、命令)を守るのだ。さすれば、アッラーはおまえを守ってくださろう。アッラー(の大義)を守れ、さすれば、アッラーはおまえとともにあるだろう。もし願いごとがあれば、アッラーにお願いもうせ。助けが必要なら、アッラーにお頼みもうせ。そして知るがよい。世界中が集まっておまえに利益を与えようとも、アッラーがお定めになったもの以上のものはもらえぬことを。また、もし世界中が集まっておまえを傷つけようとしても、アッラ

ーがあらかじめお定めになったこと以上には傷つけられぬことを。筆を取り上げられ、紙がなくなると、これはもう決められたこと。これら真実のなかのものをけって変えることはできぬ。」(『小真正集成』)<sup>(注42)</sup>

わらわ若者たちは、次の詩歌の意味を知っている。

「死が必定ならば、臆病に死ぬのは恥。」

また別の詩人は次のように詠っている。

「剣で死なずとも、死ぬものは死ぬ。多くの理由があろうとも、ただひとつ死あるのみ。」

これらの若者たちは、ムジャーヒドたちと殉教者たちへの報酬の大きさに関してアッラーとその使徒 神の祝福と祈りがあらんことを によって伝えられたことを信じている。アッラー いと高くあれ は仰せになられた。「アッラーの道に斃れた者の働きは決して無になさりはせぬ。きっと御自ら手をとって、その心を正し、前々から知らせておいて下さった楽園にはいらせて下さろう。」(コーラン 47:4-6) アッラー いと高くあれ は仰せになられた。「アッラーの路に斃れた人々のことを死人などと言ってはならぬ。否、彼らは生きている。ただ汝らにはそれがわからないだけのこと。」(コーラン 2:154) 神の使徒 神の祝福と祈りがあらんことを といわく、「アッラーの大義のために戦うものには、アッラーは楽園で百倍ものご用意をされ給う。倍のあいだですら、天と地ほどの開きがあるというのに」と(『小真正集

成』)<sup>(注43)</sup>。また彼いわく、「最良の殉教者とは、死ぬまで戦闘から顔を背けないものである。そのようなものが最高のジャンナ(天国)における。その主は彼らに笑いかける。主がその僕に笑いかけるとき、そのものに責任を負わせることはない」<sup>(注44)</sup>と。これは真正で信頼できる経路でアフマドにより伝えられた。またいわく、「殉教者は死の苦痛を感じることはない。ただ、ちょっとつままれたように感じるのみ」と(『小真正集成』)<sup>(注45)</sup>。またいわく、「アッラーにかけて殉教者の特権は保証されている。血の最初のほとばしりとともに赦しが与えられ、楽園に自分の席が示される。また信仰(イーマーン)の宝玉で飾り立てられ、美しきものを娶り、墓の試練からも守られ、審判の日にも安全を保証される。尊厳の冠をかぶられるが、そのルビーは現世(ドゥンヤ)全体とそのなかにあるものすべてに勝る。72人の純粋なる楽園の処女たち<sup>(注46)</sup>と結婚し、みずからの取りなしで自分の親戚70人もが[楽園に]受け入れられる」と。これは(真正にして信頼できる経路により)アフマドとティルミジー<sup>(注47)</sup>により伝えられた。

これらの若者たちは、おまえたちアメリカと戦うことが、啓典の民ではない他の誰かと戦うよりも2倍の報酬が得られることを知っており、おまえたちを殺して楽園に入ることのほか何の望みももっていない。異教徒やおまえたちのような神の敵は誠実なる処刑人と同じ地獄に入れない。われらの若者たちはアッラー いと高くあれ のみ言葉を詠い、朗誦する。「さ、彼らと戦うがよい。きっとアッラーは汝らの手で彼らを罰し、彼らを辱しめ、汝らを助けて彼らを撃ち、そして信者たちの胸を癒して下さろう。」(コーラン 9:14)

また預言者 神の祝福と祈りがあらんことを の言葉にいわく、「わが魂をその手に抱く神かけて、わたしは誓う。今日彼らと戦い辛抱強く攻撃し、引き下からぬものたちは死ぬことはない。まことアッラーはそのものを樂園へと連れていき給う」と。預言者

神の祝福と祈りがあらんことを はさらに彼らにいう。「樂園へと進んでいこう。そこは天と地ほどに広いぞ。」<sup>(注48)</sup>

また若者たちは次のような全能者のみ言葉を朗誦する。「さて、お前たち、信仰なき者どもといざ合戦という時は、彼らの首を切り落とせ。」(コーラン 47:4)<sup>(注49)</sup> これらの若者たちはおまえ(ウィリアム・ペリー)に説明を求めようとはしない。

彼らは歌いながら、おまえにいうだろう。われらのあいだに説明を要することなどない。ただ殺害と斬首あるのみ。

さらに彼らはおまえにいう。おまえの先祖であるビザンツ皇帝、ナグフルがムスリムを嚇したとき、彼らの先祖である信徒の統率者、ハールーン・ラシードは彼に「信徒の統率者、ハールーン・ラシードよりローマ人の犬、ナグフルへ。返答はおまえが聞くことはない。おまえが見るものこそ返答である」と応えた。ハールーン・ラシードはイスラームの軍を戦場に差し向け、ナグフルに徹底的な敗北を与えたのである<sup>(注50)</sup>。

おまえが卑怯者と呼んだ若者たちは、おまえと戦い、おまえを殺すために仲間と競い合っている。そのうちの1人は次のように詠っている。

われらがフバルを爆破したとき、十字軍は灰となった。

危険を厭わぬイスラームの勇敢なる若者とともに。

暴君がおまえを殺すと嚇されたら、応えるがよい。わが死こそ勝利なりと。

わたしがその王を裏切ったのではない、彼がわれらのキブラを裏切ったのだ。

彼は、聖なる国に人類でもっとも不潔なものを許した。

わたしは偉大なるアッラーに誓った。信仰を拒否したもの誰とでも戦うと。

10年以上のあいだ、彼らはアフガニスタンで肩に武器をかついできた。彼らはアッラーに誓う、アッラーがお望みになられれば、おまえたちが駆逐され、打ち負かされ、屈辱にまみれるまで、生きているかぎりおまえたちに対し武器をかつぎつづけるだろうと。彼らは生きているかぎり、詠いつづける。

ウィリアム[・ペリー]よ、明日、おまえは、どの若者が誤って導かれた同胞たちと戦っているかを知るだろう。

若者は笑いながら、戦い、穂先を深紅に染めて戻ってくる。

アッラーよ、平時には人間、戦時には悪魔となる騎士たちとわたしをお近づきにさせ給え。

ジャングルの獅子たち、その牙は槍にして、インドの剣。

馬たちは、わたしが彼らを戦場の炎のなかに放り込むのを見ている。

戦場の埃がわたしの証人、戦いこそが筆と帳面。

教友たち アッラーが彼らを嘉し給わん

ことを　　の孫たちを卑怯者と呼ぶことは彼らを侮辱することであり、二聖モスクの地を離れることを拒否して、彼らと対立することはおまえが罹っている狂気と精神的不安定を示している。しかし、その適切な治療法はイスラームの若者たちの手にかかっている。ちょうど、詩人が次のように詠ったように。

わたしは、落胆させたことのない騎士たちのためにみずからとその富をよるこんで犠牲にする。

騎士たちはけっして死に倦んだり、怖気づくことはない。たとえ戦の車が回りはじめようと。

戦の灼熱のなかで、彼らは、その「狂える」勇気で敵の狂気をものともせぬ。

われらの土地でおまえが武器をもっているならば、おまえを恐怖させることは合法的かつ道徳的に求められる義務である。これはすべての人類や被造物に知られた合法的な権利なのだ。われらの関係はちょうど、ある人の家に入って、そのものに殺された蛇のようなものだ。卑怯なのは、自分の土地のなかを武器をもったままおまえたちを自由に歩かせ、おまえに平和と安全を提供するほうである。

これらの若者はおまえの兵隊たちとは違う。おまえの問題は、いかにしておまえの兵隊たちを納得して戦わせるかだろう。だが、われわれの問題は、戦いや作戦でいかにわれわれの若者たちを抑えて、待機させるかなのだ。これらの若者こそ賞讃に値する。

政府が著名な学者たちを誤導し、彼らを欺いて、二聖モスクの地をキリスト教徒の軍隊に開き、アクサー・モスクをシオニストに引

き渡すという（アッラーの書にも預言者　　神が祝福と祈りを与えんことを　　のスナにも根拠のない）ファトワーを出させたとき、彼らは宗教を守るためにすくくと立ち上がった。

聖なる書の意味を曲解してもこの事実を変えることはいっさいできない。彼らは次のような詩人の賞讃の言葉に値する。

わたしは、間違っただ道を選んだすべての批判者を拒否した。

わたしは、クラブの暖炉のまえでいつまでたっても議論しつづける連中を拒否した。

わたしは、道を見失っているのに目標にいと考えるものたちを拒否した。

わたしは、困難についてずっと尋ねたり、悩んだりせずにいるものを拒否した。

行く手にいかなる苦難があろうと、その目的を放棄することはない、

その血が、混乱の間を導く炎を燃やす油であるものは。

わたしははまだ、体内でクドス（を失った）痛みを感じる。

その喪失はまるで腸のなかが燃えるよう。たとえ、国家が神との盟約を裏切ろうとも、わたしは裏切らない。

彼らの父祖たるアーシム・ブン・サービトは異教徒からの降伏の申し出を拒否して次のように述べている。

弓と矢と、頑丈な弦をもつていまだ健在だというのに、何ゆえ降伏せねばならぬのか。

死は真理であり、究極の定め、生などいずれば尽きるもの。

もしわたしがおまえと戦わぬのなら、わが母は気が狂うに違いない。

おまえのシオニストの兄弟たちはレバノンでムスリムを殺し、追いたて、聖域を犯してきたが、若者たちはこれをすべておまえの責任だと考えている。おまえが公然と武器や金をシオニストたちに提供してきたからだ。イラクおよびその国民に対する正当化できない攻撃（国連経済制裁）による食料や医薬品の欠如のため、60万人以上のイラクの子どもたちが死んできた。イラクの子どもたちはわれわれの子どもたちである。おまえたちアメリカとサウジの現体制はこれら無辜の子どもたちの流血に責任がある。これらすべてのため、おまえがわが国とどんな条約を結ぼうと、今や全部無効である。

フダイビヤの盟約は、預言者 神の祝福と祈りがあらんことを と同盟関係にあるフザーア族と敵対していたバクル族をクライシュ族が支援していたことで、アッラーの使徒 神の祝福と祈りがあらんことを により破棄された<sup>(注51)</sup>。預言者 神の祝福と祈りがあらんことを はクライシュ族と戦い、マッカを征服した。彼 神の祝福と祈りがあらんことを は、カイヌカーア族との盟約について、彼らユダヤ教徒が市場において公衆の面前で1人のムスリム女性を傷つけたため、無効であると見なした<sup>(注52)</sup>。たった1人の女性で、こうである。おまえが原因をつくった数万のムスリムの殺害や聖域の占領はいうにおよばない。今や明らかであろう、アメリカ人兵士（ムスリムの土地を占領する敵）の血が守られねばならないなどと主張するものは、攻撃を恐れ、保身にしか関心のない現

体制が強制したものを繰り返しているにすぎないのだ。アラビア半島のあらゆる部族にとって、アッラーのために戦うこと、すなわちジハードとこれら占領者から土地を浄化することは今や義務なのである。アッラーは、そこで血が（流されることを）お許しになり、彼らの富が戦利品であることをご存じだ。彼らの富は彼らを殺すものへの戦利品なのだ。至高なるものは剣の章句<sup>(注53)</sup>で仰せになった。「だが、神聖月があけたなら、多神教徒は見つけ次第、殺してしまうがよい。ひっ捉え、追い込み、いたるところに伏兵を置いて待伏せよ。」（コーラン9:5）<sup>(注54)</sup>われらの若者たちは、聖域を占領された結果、ムスリムが受けた屈辱が爆発とジハード以外では取り除くことができないことを知った。詩人はいう。

抑圧と屈辱の壁は銃弾の雨以外では倒されぬ。

自由人は異教徒や罪びとの支配には服さぬ。

墮落や汚名は流血なしに顔より除去されぬ。

わたしは、アフガニスタンやボスニア・ヘルツェゴビナでみずからの財産や筆や舌、さらには自分自身を使って戦ったイスラーム世界の若者たちに、戦いがまだ終わっていないことを想起させる。部族同盟の戦い<sup>(注55)</sup>ののちのジブリール（天使ガブリエル）とアッラーの使徒 神の祝福と祈りがあらんことを のあいだの話を思い起こせ。アッラーの使徒 神の祝福と祈りがあらんことを がマディーナに戻って、剣を置こうとした、そのとき、ジブリール 神の祝福と祈

りがあらんことを が降りてきていわく、  
「おまえは剣を置いたのか。アッラーにかけ  
て、天使たちはまだ彼らの武器を落としてお  
らぬぞ。教友たちとともにクライザ族に進軍  
せよ。わたしはひと足先に彼らの心に恐怖心  
を投げかけ、彼らの砦を震わしてこよう」と。  
ジブリールは天使たち 神の祝福と祈りが  
彼らすべてのうえにあらんことを と進み  
ゆき、そのあとにアッラーの預言者 神の  
祝福と祈りがあらんことを がムハージル  
ーン(移住者)やアンサール(支援者)とと  
もに進んでいった。(ブハーリーによって述べ  
られる)<sup>(注56)</sup>。

これらの若者は、もしあるものが殺される  
べきでないなら、[別の]1人が死ぬことにな  
ると知っている。もっとも名誉ある死とは  
アッラーの道に殺されること。彼らは、リヤ  
ードでアメリカ人を爆破した4人の英雄たち  
の殉教<sup>(注57)</sup>後、さらに決意を強くしている。  
これらの若者たちはウンマの頭を高くかかけ、  
リヤードでの作戦によりアメリカ人を辱しめ  
た。彼らは、3000人のムスリムが数十万のロ  
ーマ軍と対峙したムウタの戦いでの第二の指  
揮官、ジャアファルの詩を覚えている<sup>(注58)</sup>。

楽園とその近きこと、いともよきかな。  
冷えた飲み物でよきかな。

しかし、ローマ人どもには(地獄の)罰  
がお約束。彼らと出会えば、戦うのみ。

ジャアファルが殉教したあと、ムウタの戦  
いにおける第3の指揮官となったアブドゥッ  
ラー・ブン・ラワーハ<sup>(注59)</sup>は、若干躊躇し  
て、次のような詩を残した。

わが魂よ、おまえは殺されなくとも、い  
ずれは死ぬ。

これはおまえのまえの死のたまり。

おまえはみずから望んできたもの(殉教)  
に近づいている。おまえは、おまえ自身を  
正しく導いた2人の前任指揮官の例に従う。

われわれの娘や妻や姉妹たちは、預言者  
神の祝福と祈りがあらんことを の敬虔  
なる女性の教友たち 神が彼女たちを嘉し  
給わんことを から範をとるべきである。  
彼女たちは、アッラーの宗教の優越性のため  
に示された女性の教友たちの勇気と犠牲精神  
と寛大さのある生きざまを模範にしなければ  
ならない。彼女たちは、ハッターブの娘、フ  
ァーティマの勇気と人格を記憶せねばなら  
ない。彼女は、イスラームを受け入れ、彼女の  
兄弟、ウマル・ブン・ハッターブのまえに立  
ち、(彼がムスリムになるまえに)彼に挑んで  
「ウマルよ、もし真実があなたの宗教になか  
ったら、どうするのか」といった。また、ア  
ブバクルの娘、アスマアアの、聖遷(ヒジ  
ュラ)の日の立場を忘れてならぬ。彼女は使  
徒やその教友たちとともにあり、[マッカ郊  
外の]洞窟にいたときのこと、彼らのために  
腰紐を二つに引き裂いたのだ<sup>(注60)</sup>。さらにウ  
フドの戦い<sup>(注61)</sup>の日、アッラーの使徒  
神の祝福と祈りがあらんことを を守るた  
め戦ったナシーバ・ピント・カアブのことも  
記憶にとどめるべきである。そのとき、彼女  
は12もの傷を受け、そのうちのひとつは生涯、  
消えずに残ったという。ムスリム軍のために  
宝石を売って資金を集めた初期イスラームの  
女性の寛大さも忘れてならない。われらの女  
性たちはアッラーのための寛大さの計り知れ

ない実例となってきた。彼女たちは、アフガニスタン、ボスニア・ヘルツェゴビナ、チェチェンなどで戦うよう、息子たちや兄弟たち、夫たちをやる気にさせ、勇気づけてきた。われら、アッラーに彼女たちの行動を受け入れ、その父、兄弟、夫、息子たちを支援するようお願いする。アッラーのみ言葉を高めんがための寛大さ、犠牲的精神により、アッラーが、われらの女性たちの信仰（イーマーン）を強められんことを。われらの女性たちは、アッラーの道のために戦う男たちのため以外、涙を流すことはない。われらの女性たちはアッラーの道のために戦うよう兄弟たちをけしかける。われらの女性たちはアッラーの道の戦士たちのみを嘆き悲しむが、これについては次のようにいわれている。

嘆くのはただ森のなかの獅子、燃え盛る戦の勇者のみ。

望みは戦での誇り高き死のみ、名誉ある死の、わが現世よりもよきかな。

われらが女性たちはジハードを勧めていう。

闘士のごとく準備せよ、そは言葉よりも大なり。

われらの翼を喰らう不信の狼のもとに向け立ち去るか。

不信の狼はあらゆる地よりすべての邪なるものどもを集めたり。

武器もて自由な女たちを守る自由人はどこか。

屈辱の生よりは死のほうがまし。醜聞も羞恥も絶えることなし。

世界のわがムスリムの兄弟たちよ、

パレスチナや二聖モスクの地のあなたがたの兄弟たちはあなたがたの助けを求め、あなたがたの敵であり、彼らの敵でもあるアメリカ人、イスラエル人との戦いに加わることを願っている。彼らは、イスラームの聖域から敵が屈辱にまみれ、敗れ去って追われるよう、あなたがたに、自分自身の方法と能力で、できるかぎりのことをするよう求めている。アッラー　いと高くあれ　は聖なる書のなかで仰せになられた。「先方が汝らに、宗教上のことで助けを求めて来たならば、やはり助けてやる義務はある。」(コーラン 8:72)

アッラーの馬たち（兵士たち）よ、進むがよい。今や苦しい難儀のとき。知るがよい、イスラームの聖域を解放するため、あなたがたが集い、力を合わせることで、「アッラーのほかに神はいない」のみ旗のもとウンマの言葉を統一する正しき道。

われわれは、この場からアッラーを畏れかしこみながら手を挙げて、この問題のすべての面で神のお導きをいただけるようアッラーにお頼み申す。

われらが主よ、われら、誠実なる学者たち、イスラームのウラマーたち、ウンマの敬虔なる若者たちの獄からの釈放を確保できるようお願い申す。アッラーよ、彼らを強め、その家族を助け給え。

われらが主よ、十字架の民が彼らの馬（兵士）とともにやってきて、二聖モスクの地を占領しております。シオニストのユダヤ人がアクサー・モスク、アッラーの使徒　神の祝福と祈りがあらんことを　の昇天の道程を好き勝手に弄んでおります。われらが

主よ、彼らの集会を蹴散らし、彼らを分断し、彼らの足もとで大地を揺らし、われらをして彼らを支配せしめ給え。われらが主よ、われら、彼らの行為からあなたのもとに避難し、あなたをわれらと彼らのあいだの盾といたします。

われらが主よ、彼らの暗黒の日をわれらにお示してください。

われらが主よ、われらのため、かれらにあなたのお力の脅威をお示してください。

われらが主よ、啓典を下し給うたおかた、雲を支配されるおかた。あなたは部族同盟（アフザーブ）を打ち負かし、彼らに対しわれらを勝利させ給うた。

われらが主よ、われらをお助けできる唯一のおかた、われらを支える唯一のおかた。あなたのお力でわれらは進み、あなたのお力でわれらは戦う。あなただけにおすがり申す。あなたはわれらの根拠。

われらが主よ、これらの若者たちは、あなたの宗教を勝利させ、あなたの旗を高くかかげるため、ここに集まりました。われらが主よ、彼らを助け、彼らの心を強め給え。

われらが主よ、イスラームの若者たちを堅固にさせ給え、彼らに忍耐を下し給え、彼らの銃弾を導き給え。

われらが主よ、ムスリムたちを団結させ、彼らの心のなかに愛を与え給え。

われらが主よ、われらに忍耐を与え給え、われらの歩みを強め給え、不信仰者に対し、われらを助け給え。

われらが主よ、あなたがかつてわれら以前のものたちに負わせたように、われらに重荷を負わせぬようお頼み申す。われらが主よ、われらに、抱えきれぬものを課されぬようお

願い申す。われらに保護を与え給え、われらに慈悲を垂れ給え。あなたはわれらが後援者、不信仰者どもに対しわれらを助け給え。

われらが主よ、このウンマを導き、正しい状況にさせ給え。（それによって）あなたに服従する人びとは敬われ、従わぬ人びとは辱められましょう。それによって善行が命じられ、悪行が禁じられましょう。

われらが主よ、あなたの僕にして使徒であるムハンマドおよびその家族、子孫たち、教友たちに祝福と祈りを与え給え。

わたしの最後の頼みはただひとつ、すべての賞讃がアッラーのためにあらんことを。

ウサーマ・ブン・ムハンマド・ブン・ラーディン

1417年ラビーアッサーニー 9日

（西暦1996年8月23日）

アフガニスタン、ホラーサーン地方、

ヒンドゥークシュ山脈にて

（注1） 拙稿「オサーマ・ビン・ラーデン研究序説 テキスト分析に向けて」（『現代の中東』No. 33, 2002年7月）。

（注2） *The Guardian*, October 18, 2001. 同紙は書簡抜粋のみ掲載している。書簡そのものは忠言と改革委員会ロンドン事務所で押収されたもの。

（注3） *The Independent*, September 2, 1996.

（注4） 通常のムスリムの著作が「慈悲深き慈愛遍きアッラーのみ名によりて」という、いわゆるバスマラからはじまるのと異なり、「讃えあれアッラー」という句からはじまっているのには注意が必要である。詳細は拙著『正体 オサーマ・ビン・ラーディンの半生と聖戦』（朝日新聞社、2001年）148～149ページを参照。

（注5） コーランの訳は井筒俊彦訳『コーラン』（岩波文庫版）を使用した。章節番号はエジプト版による。

（注6） イスラーム以前の預言者の1人。

（注7） 引用元の言及なし。

(注8) 1996年、レバノンのカーナーにあった国連キャンプに対し、イスラエルが攻撃をしかけ、大量の一般市民が犠牲になった事件。

(注9) パッターニはタイ南部、マレーシアとの国境付近であり、仏教国タイにあって、ムスリムが多数居住する地域。オガディンは東アフリカの地域。

(注10) 英訳テキストでは Al'iz Ibn Abdes-Salaam となっているが、おそらくイッズッディーン・アブドゥルアジーズ・ブン・アブドゥッサラーム・スラミー(1262年没)のことであろう。シャーフィー派の権威として有名。

(注11) パレスチナ人のムスリム同胞団員で、ウサーマの卒業したアブドゥルアジーズ国王大学で教鞭をとっていたが、のちアフガニスタンに渡り、ウサーマらとともに対ソ連聖戦でアラブ義勇兵の活動で指導的役割を果たす。1989年何ものかによって爆殺される。

(注12) パレスチナのハマースの精神的指導者。ここでいう逮捕とはイスラエル当局による逮捕を指す。

(注13) エジプトのイスラーム集団の精神的指導者。1993年の世界貿易センタービル爆破テロに関連してアメリカで逮捕され、現在も拘禁中。

(注14) アウダおよびハワーリーとともにサウジアラビアの若手中堅どころのウラマー。湾岸危機当時より米軍のサウジ駐留などに反対し、しばしば逮捕されてきた。ウサーマはあるインタビューでもっとも尊敬する人物としてサルマーン・アウダの名前を挙げたことがある。

(注15) 1995年11月にサウジアラビアの首都リヤドにある国家防衛隊のアメリカ軍関連施設で爆弾テロ事件が発生、アメリカ人ら7人が死亡した。また翌1996年6月にはサウジ東部州のホバル(フバル)にあるアメリカ軍関連施設で爆弾テロがあり、19人が死亡している。

(注16) 引用元に関する言及はないが、*Ṣaḥīḥ Muslim* には、姦通を犯して妊娠した女性が預言者に罪を告白し、罰を求めるという話が出ている。それによると、預言者は、女性が出産し、子どもが成長するまで待って、女性を石打刑にしたとされる。ハーリド・ブン・ワリードが女性を呪いながら、石をぶつけようとする、預言者は彼に対し「やさしくしてやりなさい。彼女は、悪い徴税人が改悛すれば、赦しを

与えられたような改悛の情を示している」と述べたという(17:4206)。

(注17) ファハド国王の実弟、第二副首相兼国防相。

(注18) ファハド国王の実弟、内相。

(注19) 13世から14世紀にかけてダマスカスなどで活躍したハンバリー派法学者。既存のウラマーやスーフィーを激しく非難し、何度も投獄の憂き目に遭った。モンゴルに対するジハードを呼びかけたことはよく知られており、18世紀のワッハーブ派に大きな影響を与えた。

(注20) どこからの引用かは不明。

(注21) 英訳テキストでは『ファトワー集補遺』となっているが、ロザリンド・グウィンによれば、これは *al-Fatāwā al-Kubrā* のなかの *Kitāb al-Ikhtiyārāt al-Ōlīyā fī Ikhtiyārāt Shaykh al-Islām Ibn Taymīya* だという(Bayrūt: Dār al-Ma'rifa. 1988, vol. 4, pp. 319–559)。なおグウィンは英訳にある「集合的義務」(英訳では collective duties)が「合意にもとづく義務 ijma'an」の誤訳だと指摘している(Rosalind Gwynne. "Al-Qa'ida and al-Qur'an: The "Tafsir" of Usamah bin Ladin." [http://web.utk.edu/~warda/bin\\_ladin\\_and\\_quran.htm](http://web.utk.edu/~warda/bin_ladin_and_quran.htm))。通常、ジハードは集合的義務(あるいは連帯義務)として行われる場合と個人的義務として行われる場合の両方があるが、イスラームの領土が異教徒から侵略されたときには、ジハードは個人的義務となり、全員参加が基本となると考えるのが一般的である。

(注22) グウィンの指摘では 28/506。これはイブン・タイミーヤのもっとも有名なファトワーからの抜粋である。全体の統一のため使用しなかったが、このファトワーには日本語訳がある(湯川武・中田考訳『イスラーム政治論 イブン・タイミーヤ シャリーアによる統治』日本サウディアラビア協会、1991年、187~188ページ)。

(注23) イスラームの神話的人物。神より知恵を授けられたといわれている。

(注24) アフマド・ブン・ハンバル(780–855年)。ハンバリー派法学の祖。引用は彼の伝承集、*Musnad* から。ただし、オリジナルのアラビア語では「大義」に相当する語はない(*Musnad al-Imām Aḥmad*, 254)。

(注25) いずれも預言者ムハンマドの教友。

(注26) エルサレムのこと。ムスリムは当初、マッカ

ではなく、エルサレムに向かって礼拝を行っていた。そのため、エルサレムは第一のキブラ、最初のキブラと呼ばれる。この部分はおそらく1948年のイスラエルの独立およびそれにつづくパレスチナ戦争（第1次中東戦争）のことを指しているのであろう。ちなみにサウジアラビアも少数であるが、対イスラエル戦争に軍を派遣している。

- (注27) 日本語訳では第4巻281ページに相当する部分がある（ブハーリー『ハディース』牧野信也訳、中公文庫版）。
- (注28) *Ṣaḥīḥ al-Jāmiʿ al-Sagħūr* ハディースは未確認。
- (注29) クリントン政権時代の国防長官。
- (注30) 言及した本は不明。ハワーリーは同じテーマで *Kaṣḥ al-Ghamma Ōan ŌUlamāʾ al-Umma*. Dār al-Ḥikma. 1991 という本も書いている。ただし、ページ数は異なる。
- (注31) いわゆるパレスチナ・アラブ大反乱。
- (注32) ウラマーたちによるアメリカ軍駐留を容認する声明については *Aṣḍāʾ al-Mawqif al-Saʿūdī khilāl Aḥdath al-Khalīf al-ŌArabī al-Riyāḍ*. pp. 46–48 を参照。
- (注33) 1990年9月と1991年1月にマッカで世界イスラーム連合の主催で大規模なイスラーム関係シンポジウムが開催され、イラクのクウェート侵攻に関して議論が行われている。1991年の会議終了後、ファハド国王が会議参加者と会談しているので、ここで言及されているのはこの会談のことであろう。だが、このときの記録からはこの発言は見つからなかった。
- (注34) 未確認。
- (注35) 未確認。
- (注36) ナサーイーは有名な伝承学者（830–915年）。彼の編纂した *Sunan* はいわゆるサヒーフ六書のひとつ。このハディースは未確認。
- (注37) マッカにおける預言者ムハンマドの教敵。624年、バドルにおけるイスラーム軍対マッカ軍の戦い（バドルの戦い）で戦死。
- (注38) 預言者ムハンマドの最初期の教友の1人。
- (注39) マッカのエチオピア系奴隷で、預言者の教友の1人。ウマイヤ・ブン・ハラフはその主人だったといわれる。
- (注40) ハディースは未確認。
- (注41) アムル・ブン・ヒンドはアラビア半島キンダ王国の王。詩人のアムル・ブン・クルスームによつて570年、暗殺される。前者の母が後者の母をいじめたためといわれている。
- (注42) ハディースは未確認。
- (注43) ハディースは未確認。
- (注44) 最後の部分は英訳テキストでは “He will not hold him to an account” となっているが、意味がとりづらい。ハディースは未確認。
- (注45) ハディースは未確認。
- (注46) アラビア語ではフル。コーランに登場する楽園の永遠の処女のこと。信者は現世での善行の報酬としてフルを妻として娶ることができる。
- (注47) アブーイーサー・ティルミジー（825–892年）。伝承集、*Sunan* の編者。引用されたハディースは未確認。
- (注48) この二つのハディースの典拠は英訳テキストにおいては明示されていない。ハディースそのものについても未確認。
- (注49) 英訳テキストでは 47:9 となっているが、間違い。
- (注50) ナグフルはビザンツ皇帝ニケフォロス 世のこと。802年、ニケフォロスはアッバース朝に対し貢納を拒否するという書簡を送付し、ハールーン・ラシードを激怒させたといわれている。本文の逸話はこの書簡への返信を指している。またこの結果、アッバース朝軍は黒海沿岸のヘラクレアとアナトリアのフリギアをビザンツから征服した。
- (注51) 628年、イスラーム側とクライシュ族はフダイピヤの盟約を結び、休戦に合意したが、翌年、イスラーム側と同盟を結んでいたフザーア族とクライシュ族につくバクル族のあいだで戦闘が発生した。この事件がきっかけでその後イスラーム側がマッカを無血占領することになる。
- (注52) 624年、バドルの戦いでの勝利の直後、この事件をきっかけにムハンマドはマディーナのユダヤ教徒部族、カイヌカーア族をシリアに向けて追放した。
- (注53) コーランでもっぱらジハードに関して言及した章句のこと。とくに第9章改悛の章。
- (注54) 実際にはこのあとに「しかし、もし彼らが改悛し、礼拝の務めを果たし、喜捨もよること出さようなら、その時は遁がしてやるがよい。まことにアッラーはよくお教しになる情深い御神におわします」とある。

(注55) 627年の塹壕の戦いのこと。

(注56) クライザ族はマディーナのユダヤ教徒。627年の塹壕の戦い後、イスラーム軍はクライザ族を包囲し、全面降伏させた。その後、クライザの男性は全員処刑され、女性や子どもはイスラーム側の奴隷にされた。英語原文にはブハーリーからの引用と明示されているが、ブハーリーの原文にはムハーヅルーン、アンサール云々の記述はない(『ハディース』第4巻、155ページ)。

(注57) テロ実行犯は逮捕されたのち全員、処刑された。

(注58) 629年、ムウタでイスラーム軍がビザンツと戦い、大敗を喫した。ジャアファルはアリーの弟で、

預言者ムハンマドの従弟。彼もこの戦いで戦死した。

(注59) 当時としては珍しく読み書きができたので、預言者ムハンマドの秘書役を務めていた。詩人としても有名。

(注60) 腰紐を二つに裂いて、ひとつは預言者ムハンマドの食料を入れた袋の、もうひとつは彼の水用の皮袋の紐とした。このため彼女に「二つの腰紐の持ち主」という綽名がつく。

(注61) 625年(626年説も)に起きたイスラーム軍とマッカ軍の戦い。イスラーム軍側の敗北に終わる。

(ほさか しゅうじ / 早稲田大学エジプト学研究所  
客員研究員)

オサーマ・ビン・ラーデン声明・インタビュー・リスト

年 月 日	種 別	媒 体 な ど
1993/12/ 3	インタビュー	インデペンデント
1994 ?	忠言と改革委員会声明 1	
1994/ 4/13	忠言と改革委員会声明 2	
1994/ 6/ 7	忠言と改革委員会声明 3	
1994/ 7/11	忠言と改革委員会決定	
1994/ 7/12	忠言と改革委員会声明 4	
1994/ 7/19	忠言と改革委員会声明 5	
1994/12/29	ビン・バーズ宛公開書簡	忠言と改革委員会
1995/ 8/ 3	国王宛公開書簡	忠言と改革委員会？
1996/ 5/ 6	インタビュー	タイム
1996/ 6/16	インタビュー	ローズルユースフ
1996/ 7/10 - 11	インタビュー	インデペンデント
1996/ 8/23	対米ジハード宣言	
1996/ 8/23	書簡	ラ・リブブリカ (2001/11/17)
1996/10	インタビュー	ニダーウルイスラーム
1996/11/27	インタビュー	クドスルアラビー
1997/ 2/20	インタビュー	チャンネル・フォー
1997/ 5/11	インタビュー	CNN
1997/ 5/14	インタビュー	フクーク
1998/ 2/23	イスラーム戦線ファトワー	クドスルアラビー
1998/ 4/16	書簡	ラ・リブブリカ (2001/11/17)
1998/ 5/ 7	書簡	ラ・リブブリカ (2001/11/17)
1998/ 5/26	記者会見	於アフガニスタン
1998/ 5/29	書簡	ラ・リブブリカ (2001/11/17)
1998/ 6/10	インタビュー	ABC
1998/ 6/15	インタビュー	ニューズ
1998/ 8/27	インタビュー	フランス・ソワール
1998/ 9/11	インタビュー	週刊ポスト
1998/11/18	ジャミール・ハーン宛書簡	ジャング
1998/12/26	インタビュー	BBC・シャルクルアウサト
1999/ 1/ 2	インタビュー	ABC
1999/ 1/11	インタビュー	タイム
1999/ 1/11	インタビュー	ニューズウィーク
1999/ 6/10	インタビュー	ジャジーラ
1999/ 9/17	対インド聖戦声明	ジャング
2000/ 8/23	インタビュー	ガージー誌 (日付はパーキスターン紙)
2000/11/13	インタビュー	ラァイルアーンム
2001/ 1/10	結婚式	ジャジーラ
2001/ 9/12	書簡声明	アウサーフ

年 月 日	種 別	媒 体 な ど
2001/ 9/16	プレス声明	アフガニスタン・イスラーム通信等
2001/ 9/24	書簡声明	ジャジーラ
2001/ 9/28	インタビュー	ウンマ
2001/10/ 1	声明	ナワーイワクト
2001/10/ 7	ビデオ声明	ジャジーラ
2001/11/ 1	書簡声明	ジャジーラ・BBC等
2001/11/ 3	ビデオ声明	ジャジーラ
2001/11/10	インタビュー	ドーン・アウサーフ
2001/11/ 8	公式伝記日本語版へのメッセージ	国家社会主義日本労働者党ウェブページ
2001/12/ 9	ムスリム青年への惜別メッセージ	Azzam Publications
2001/12/13	ビデオ	アメリカ政府
2001/12/27	ビデオ声明	ジャジーラ
2002/ 1/31	インタビュー	CNN ( ジャジーラ, 2001/10/21 )
2002/ 3/17	ムハンマド・オマル宛書簡	ニューヨーク・タイムズ
2002/ 3/28	電子メール	クドスルアラビー
2002/ 4/17	ビデオ声明	ジャジーラ
2002/ 4/21	ビデオ声明	MBC
2002/ 5/19	ビデオ声明	サンデイ・タイムズ
2002/ 6/26	詩	シャルクルアウサト
2002/ 8/20	記者会見	CNN ( 1998/5/26 )
2002/ 8/25	アフガニスタン人宛書簡	Islamonline.com
2002/ 9/10	ビデオ声明	ジャジーラ
2002/10/ 6	アメリカ国民宛録音声明	ジャジーラ
2002/10/ 9	パキスタン人宛書簡	Jehad.net
2002/10/12	イスラーム共同体宛声明	Alneda.com
2002/10/14	ファックス声明	ジャジーラ等
2002/10/25	遺書	マジャッラ ( 遺書の日付は2001/12/4 )
2002/11/13	アメリカ同盟国宛録音声明	ジャジーラ
2002/11/24	アメリカ国民宛書簡	オブザーバー
2003/ 1/19	メッセージ	イスラーム調査研究センター ( 日付はシャルクル アウサト紙 )
2003/ 2/12	録音メッセージ	ジャジーラ
2003/ 2/16	録音メッセージ	ハヤート ( 抜粋 ), www.ansaarnews.com 等
2003/ 4/ 8	録音メッセージ	AP
2003/ 4/ ?	クウェート人へのメッセージ	Rightword.net
2003/ 4/10	イラクのムスリム同胞たちへのメッセージ	Jihad Unspun
?	フトバ	Supportersofshariah.com
?	リクルート・ビデオ	
?	イード説教	

( 出所 ) 筆者作成。